

パラリンピックアルペンスキー金メダリスト・(株)電通パブリックリレーションズ

大日方

OBINATA
Kuniko

邦子さんに伺いました

聞き手

武居 秀訓
編集委員

[writer] 駒崎 文男
[photo] 永田 正男

冬季パラリンピックにおける日本人初の金メダリストの大日方邦子さん。
大日方さんから見た土木施設についてご意見を伺った。

2010年9月30日(木)
(株)電通パブリックリレーションズ

天気や雪とはケンカをしない

——長野冬季パラリンピックでは日本人初の金メダリストに輝き、バンクーバー冬季パラリンピックでも大回転と回転で銅メダルを獲得されました。競技スキーの魅力はどこにあるのでしょうか。

大日方——スキー競技は、自分自身を高めてくれる素晴らしいスポーツです。たとえば、自然が相手ですから、個人の努力だけではどうしようもない部分があります。私は天気や雪とケンカをしないとよくいうのですが、その時々に応じて、自分の体調や体力といった自分側の要素と、雪質や斜面の状態、天気、気温など周りの自然とのバランスをどのように取っていくかがとても重要になります。自然を相手に、いか

に自然と調和していくか。そこに大きな魅力を感じています。

私自身のことでは、小さい頃から自然の中で遊ぶのが大好きな子でした。3歳で事故に合い、義足をつけて生活をするようになってからも、木登りが一番好きというくらい活発でした。家族で海へ行ったりして、水泳もやっていたのですが、自然の中に身を置くことで、ありのままの自分を出せるというのが好きだったのです。

このままでは選手がいなくなってしまう

——今年9月、ナショナルチームからの引退を表明し、今後は国内大会に出場しながら後進の育成にあたる予定とのことですが。

大日方——私が今一番危惧しているのが、このままでは選手がいなくなってしまうということです。私たちナショナルチームの人間の活動拠

点は、ほとんどが海外です。年間を通じて半年は海外で生活をしています。ですから、若い選手と交流する機会が少なく、若い選手もなかなかレベルアップができないということがあります。また、協会も選手を支援するための経済的基盤がなく、若い選手で素質を持っていても、経済的理由から早い段階であきらめ、やめてしまふ選手が多いのです。そういう状況を今ままで選手として体験してきた立場で、改善していければと思っています。

なくすことができる障がいもある

——スキー以外では、ソーシャルビジネスでユニバーサルデザインに関するコンサルティングに取り組まれるとのことですが、土木施設について日常の生活で感じていることはありますか。また、障がい者や高齢者などすべての人が快適に土木施設を利用できるようにするためのアドバイス

などはありませんか。

大日方—— 私たちのように障がいを持って生活している人間というのは、ある意味、高齢者の疑似体験をしているという見方もできると思うのです。皆さんが障がい者になるかどうかはわかりませんが、誰もが高齢者になることは間違いありません。そのときには、思うように歩けない、よくものが見えない、よく聞こえないなど、広い意味での障がいを持つことになりま。たとえば、皆さんは今、速足で歩くことができると思いますし、道路のゆがみ、傾きがどれほどきついことなのか実感がわからないでしょう。道路をわたっている途中で信号が変わる恐怖感なども、あまり感じることはないと思います。でも、歳を取れば、誰もが道路の少しの傾



大日方 邦子(おびなた・くにこ)さん プロフィール

1972年東京都生まれ。1996年中央大学法学部卒業後、NHK入局。2007年に(株)電通パブリックリレーションズ入社。1989年にスキーを始め、1994年のリレハンメルパラリンピックを皮切りに2010年バンクーバーまで5回連続出場、10個のメダル獲得。日本パラリンピック委員会運営委員、厚生労働省社会保障審議会専門委員。

きでもきついと感じるようになるのです。

障がいには二つの意味があります。一つは身体的な意味での機能の衰えや欠落です。もう一つは、社会的な整備や制度上の不備ゆえの障がいです。前者は避けようがありませんが、後者の場合は社会的な整備や周りの理解によって障がいをなくすることができます。

私は今渋谷に住んでいるのですが、首都高速環状線の工事で、地上の整備のためメインストリートの歩道でかなり斜度がついていて、通れない場所があります。知らずに入ってきたお母さんも必死にベビーカーを押ししている。そのような場所は高齢者の方にとっても危険です。それが工事中だからかと思っていたら、もう何年も続いているのです。たとえ一時的な工事で

あつても周りの人たちは日常生活をしているわけですから、もう少し思いやりを持ってほしいと思うのです。

また、工事中の地下の見学会があり、申し込んだところ、車イスでは見学できないと断られたことがあります。こういうとき、ただ断るのではなく、なぜ見学できないのか説明が必要だと思えますし、一般の人とは別の日にするか、方法を考えればできることもあると思うのです。インフラを整えていくことはとても大切ですが、つくりっぱなし、できたらそれで終わりというのではなく、つくる前、つくっている途中、できた後と、それぞれの段階でもっといろいろな人とコミュニケーションを取っていただければ、多くの住民の理解もより深まるのではないのでしょうか。

さらに、バリアフリーも今はまだ点と点でしかなく、面としてのつながりがありません。私は車イスやつえを使って地下鉄で移動しますが、エスカレーターで地上に出ようとすると、出口まであと少しなのにエスカレーターがなくて階段だけという場所があり、はしごを外されたような気持ちになります。せめて、ルートを決める前に正確な情報が示されていけば、違うルートを使うこともできると思うのです。ハードだけでなくソフト面、情報の整備も重要です。私自身、自分の経験で感じたこと、改善していきたいことを、これから提案していきたいと思っていますし、土木に携わる人たちもさまざまな意見に耳を傾けていただければと思います。